

## 化粧における非対称性

藤 本 浩 一

神戸松蔭女子学院大学文学部心理学科

アイラインやアイシャドウが始まった紀元前 530 年頃以来、化粧は左右対称であり、顔に対する左右非対象の装飾としては、化粧の歴史の中で 17 世紀に流行したパッチ(美斑)が見出される程度であり、顔の化粧としての非対称化粧はみられない。しかし、様々な試みが行なわれつつある新しい世紀に、突如現れないとも限らないのである。本論では種々の個人内要因と非対称化粧に対する印象評定との関連を検討することを目的の 1 つとし、3 つの調査研究により、非対称化粧が他者にどのように評価されるかを調べ、素顔や普通化粧顔と比較した非対称化粧顔の印象の基礎データを収集する。次に自己意識や流行を追う心理などの個人内要因と非対称化粧に対する態度との関連を検討する。最後に女性被験者に実際に化粧を行なわせて対人場面の体験報告を求めて、非対称化粧の満足度や社会的な意味付けを問う。

### 【結果および考察】

#### 【実験】非対称化粧を施した女性の顔写真の印象調査

・「女性的成熟度」や「奇抜さ」の印象を与え、他方、人柄については否定的評価が見られた。適度なズレは好ましく感じられる場合もあるが、対称化粧からの隔たりは人々に許容される程度のものにとどめておく方がよいであろう。

・人物間の非対称化粧の効果の違い：幼顔ではあまり奇抜な非対称化粧は有効でなく、逆に成熟顔では適度に目新しい非対称化粧が魅力や自信を引き上げてくれることが示唆される。

#### 【実験】非対称化粧受容度と個人の自己意識・流行を追う心理・自己評価重要度等の諸要因間の関係を集団調査により検討

・自己意識との関連：公的自己意識の高い人は、化粧一般及び非対称化粧に対する関心が高くなる。他方、私的自己意識の高い人は非対称化粧は他人事に思っている。

・別の自分を演出することと一般他者の価値観の二重構造：非対称化粧はおかしい、変だといういわゆる「三人称の鏡」すなわち客観的・世間的な価値基準が被験者の中に存在し、同時に他者の批判的な眼差しを逃れたところで密かに変身してみたい願望があるといえる。

#### 【実験】他者からの眼差しの影響の受け取り方や非対称メイクに関する自己意識の変化を調べる

・自己意識等との関連：自己意識などの諸要因と明確な関係が見られなかった。

・一人称、二人称、三人称の眼差し：若者達は他人と少し違う自分を演出して斬新さと自由と個性を主張しようとする。その時に最も肯定的な関心を示してほしい相手は、見ず知らずの他人ではなく、身近にいる親しい人間(二人称)なのである。通りすがりの他者の視線(三人称)は自分自身で鏡をみること(一人称)の中に入り込み、非対称化粧によって演出された別の自分の姿を振り返らせ、違和感をよみがえらせてしまう役割をする。他方で三人称の視線に少し危ない自分をさらす時に、人目を避けたい、でも見て欲しいという両方の気持ちでワクワクした体験を味わえるのであり、二人称ではそうはいかない。